

鑄重

日本蘇州記

冬

76
5440
4



76
5440
4



87842

<2000-3027

日本歳時記卷之六

冬

澤書律曆志云冬終多雨
維小冬と云夏の○和終
こゝろなり天動をひきてひゆる
ゆをりひとやとお通す

花鳥園



素問云冬三月これと閉藏といふ水氷を地拆
湯沃授の事ありれり砂吹く起るる必り老と
然る志として休すことと匿ることとを秘す
あつこ己まゆるるるちひるるるあつこ免るる志
温はつまは膚と泄す事ぬ氣をこしてとや
ゆをりむるるふられは冬終れぬのあつこ
おのれの道をゆくこれと閉藏の時を賢と傷ひるる

とありなまのりものか

平金方にいとく冬を天部れ氣閉血氣伏病あり人
又勞心あり汗とわ湯堂とあはせりす

月令度義よいとく冬に天部れ氣閉血氣伏病あり人
事只の暖を所しりてしり大に換るれりあす
眼疾瘡瘍癰疽とくまふ

寒さの書よいとく冬に天部れ氣閉血氣伏病あり人
厚衣よ久しそやめされ血と換す

金匱要略よいとく冬に天部れ氣閉血氣伏病あり人
又雪及七載にいとく冬に天部れ氣閉血氣伏病あり人

暖なりと睡意あり時目とたり氣と吐くは積毒
とあせも病あり冷物鉄石等と枕するもあす

人なりて眼勝りしむ
月令度義よいとく冬月天部れ氣閉血氣伏病あり人

と飲くと和とあせりて一は生薑をもちむと又
可なり天部れ氣閉血氣伏病あり人

多し晨を服しりてこれと和るもあす
王肅然衛馬均とよもの三人を務とて晨を

りもひとり一人を病し一人を病し一人を病し
病とあすは死すものちを後なり病せられた

朔日 いろいろして今日燻燻會とて民間并ははる
酒のこ肉と食ひたのむ事あるや冬は初を
何〜〜めき氣と流るるとも今を世日初と燻と
習く人何燻燻乃とてこれらや

足利明宗時雜記曰京人十月初沃酒乃炙醬肉於
燻中團坐飲酒之燻燻之義事錄曰十月初有司
進燻燻炭民間坊置酒作燻燻會

○古例よき今日考妣之祭乃墓而と流す一凡
父母先祖の墓と流すは五と女子と定たたと
古と流すは女子と流すは地と流すは一孫を流
二孫を流す一りりりりの流す二孫と流すは
合掌と天竺花流すりる流すところ〜乃流すは
おむじ〜の流すの流す〜おむじ〜休沐の事
た進ん合掌の流す

程子書曰孫墳幻十月一日拜之感其也食則
又流等神事之竹食則祭者有流子曰食と十月
朔日展墓志可る竹本初生初死家終事也曰程記云
以十月一日墓祭事錄曰十月初郡城士庶皆
登墳於中車馬朝漢如食節○南粵志十月一日
國中既作於祀福報於化家化祀之祀蓋告冬之

八月紅梅と取て皮を削り中につくぬき又赤く糸と
 むきいて日干し皮をとりぬきそのうち糸を包て
 焚きしじ又梨子と收まきし梨子と收りた梨子と
 穀類若くはく梨子一顆よきとくしぬきしり
 酒をちりすおよ玉い久よ塩の風をよ煮くしぬき
 月今度取よ尺えたり又揉むる大梨とくしぬき
 薑と元ふり蒸すに挿し紙よ包て暖るのちおよ玉
 え玉深くぬきぬきと揉むに換と煮くす柑梅も
 又びとくすしし居る為勇よ尺えたり又梨子
 と漆をぬれハスして揉む次又拍部お感よ玉

梨子と收まきし蒸すといくす梨子の付合たりや
 うにこれハ年と経く揉むに力たり

八月乃末蒸すの中実一たりと蒸すし十一月
 よいんハ中虚して何し

○蘿蔔醃乃法 蘿蔔 千片 細粒 一石 麴 二斗 塩 三斗

先方根と取日干し切し後細粒と塩麴とすり
 合せ桶乃底よ玉蒸すとぬきぬきとすり又粒塩麴
 とすり何つんすもぬきぬきしは久しく端よ
 ○又法 大方の蒸す中実一たりと入すしとけきて
 たりし時用ひ先より塩多きれいあり又ぬきぬき

たくと入へん

○又法 蒔菫とよくほひこりかちり毎粒席とやひ
葉亦少わつこかく後まるとわつひ水等たりは濁り
蒔菫一つんをく塩と蒔菫かこゆかきまうりまよ
鹽とまらめはほしに漬ゆとりけまへー又た根を
ほきこ後よゆ乃糟よ米糞とつらませたの大根と
まいくほひ乾ちり漬る也

此月又竈を修繕す

げ月 梔子の結熟せりと取日と物一葉と一又
浴とす但葉ふのいあつと用ぬあふ心梔子と云

又月今廣義よつと十月は梔子の熟まよと云ひ物

一葉と云ふは二月は熟まうぬまのりて灰土とく
ひい熟まうゆりこく一葉は年極一葉は定通
けしてまよと結まよとく又月まよ一葉はりて

名物畫傳よつと十月は蒔菫のまよは枝と一尺を

よまうり日所まよは枝と云ふて一葉は多くまよ
まよは月まよりて根まよりて水邊林下まよの地
けしこりちらちらゆきハ浴せまうりまよ一葉は年所
花とまうりてまよ一葉は月所てまよ
まよらちらちらゆきハ浴せまうりまよ一葉は年所

い月の中より桐樹を紅葉多しう其葉をみし時
 年のよりしやよりて遷移の候候とさうされん
 十一月上旬より葉をみるあり凡紅葉のまをれ
 花をみしよりさうはなり一田賦の紅葉は
 一総田の紅葉のまをれ一西のまをれ
 一初秋の紅葉のまをれ
 遷移候よりて是月暇帽と裁くまをれ暇候
 紅やせの暇暈乃疾なり

い月半よりい月の末に魚肉を食みふられ椒を
 ころの魚肉とわゆる進とさうの魚肉多し一葉を
 ころの魚肉とさうの魚肉多し一葉を
 ころの魚肉とさうの魚肉多し一葉を
 ころの魚肉とさうの魚肉多し一葉を
 ころの魚肉とさうの魚肉多し一葉を
 ころの魚肉とさうの魚肉多し一葉を
 ころの魚肉とさうの魚肉多し一葉を
 ころの魚肉とさうの魚肉多し一葉を

十月の末候より一水如氷の地始凍り二地始凍り三地始凍り
 為屋太きみみれ候より中虹を見ず
 氣と勝才の地字中海剛寒氣多し
 立冬を過すに刻中分秋中分刻十分を過す
 酒及射 月令度義



十一月

高と大雲と云中と冬と云○十一月は夫名伴冬奉月
後服 御と高瀬と云○十一月の和名と書月といふ
事とたりにうへと書海月
と早と異せる事

朔日 周乃代まの月をひく 兼者とゆれい今日を
あつら周代時の西月元日なり 天をみん并くは兼
とどわると

そのま十一月乃中なる三玉とて一玉陰徳の玉ニテハ
陽氣如くこに冬日ひもよむらひ衣とむらひまよ
冬は代あ一日はむりて陰氣もどるころまのまの日の
乃くうたむらむら又衣もまのまのまのむらひのむら
はむらむらまのまのまの今日一陽来後して後陽氣は

に長一日も厚うや長くたの湯守代如くすはつ時かれ
く芳助まう次安好にて微湯と兼之く一閉戸恐
せしてあ事のゆくと人のあひまうひ又奴僕と兼
被りしむらむら

易曰 雷在地中復先王以 剛閉高旅 不終后不者
方白虎通曰 此日湯氣微弱 王若承天 祀也 在率天个
終不後 役扶助微氣 来宗地也 伊川易傳曰 湯如
至甚微 在終る後 長有後之象 曰先王 至日 閉闔 未子
曰一陽初復 湯氣甚微 不可芳助
○今日 德と兼し 一人奴僕もあまの湯後と兼す

一又先祖考妣乃孟采子之歿一孟海とるるが前
果とをさむ

○冬孟乃日精進改火ハ瘟疫と云く後漢書代改
石ノ尺之より後と漢ニハ本とリ之ハ火と云る
松子夫々冬孟乃のち

天時人事日相侷冬孟湯生喜又來刺張五級流弱
線吹散亡策劫飛所岸若は臘將軒柳天守樹之
歌放梅をゆす珠郷國天教也且霞亭中林

○冬孟の後十日房事と云く一と云く孟海のんえり
比ハ人カハ氣とゆくひろ免かくくちらて池と云る

いへる事孟を後代根事とす一素問の云冬不養
善形瘰癧すく又冬孟乃の前後十日婦人す今ハ

十五日 孟子の卒せし日あり
崖壁考云孟予周報王二十六年
月十五日卒 即今十月十五日

晦日沐浴

予ハ國乃農氏ハ月ハ初代丑の日國神と云るとして
とる多々その服と云るちく男女何れもして飲宴一人
とる事あり乞の比よりくくくくくくくくくくく
賤乃男儀の如きた回此神とのひく何れ神
と云るくく事と云く此予抑りふ来禱と云る
如く耕能たると云く此ハ神農氏を重ハ今ハ

西に回れを休農氏といふ事ありしこれに休農の人乃牛
前じといふは日いあるや五と申とお通ふと用りな

ありし月よはあつとさるるなり農事終らぬをいふは

農事と耕とをいふ事ありし杜氏曰農事といふは伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

乃あるはちとくありしなりとさるるなり伊耆の代始有耕種也

入莖（いんけい）籠（かご）みくむし（むし）能（よ）焚（や）し（ら）る（る）時（とき）取（と）り（て）日（ひ）の（り）竹（たけ）を（も）
 かき（り）た（る）る（る）時（とき）下（さ）く（く）新（あたら）し（き）と（う）け（し）中（な）の（り）初（は）め（に）至（る）る（る）
 能（よ）日（ひ）の（り）初（は）め（に）入（り）流（る）く（く）風（か）吹（く）水（みづ）は（も）
 沸（き）り（て）煮（ゆ）く（く）凡（た）抽（ひ）く（く）大（おほ）抽（ひ）煎（せん）と（し）煎（せん）く（く）水（みづ）は（も）
 久（ひさ）く（ひ）煮（ゆ）ん（だ）ち（も）た（れ）く（く）煮（ゆ）く（く）

○金橘（きんきつ）の（り）法（ほう） 金橘（きんきつ）の大（おほ）き（き）と（し）取（と）り（て）取（と）り（て）油（あぶら）を（も）し（ら）る（る）
 て（い）ら（う）こ（し）よ（も）あ（ら）か（し）る（る）日（ひ）の（り）初（は）め（に）入（り）流（る）く（く）風（か）吹（く）水（みづ）は（も）
 沸（き）り（て）煮（ゆ）く（く）凡（た）抽（ひ）く（く）大（おほ）抽（ひ）煎（せん）と（し）煎（せん）く（く）水（みづ）は（も）
 久（ひさ）く（ひ）煮（ゆ）ん（だ）ち（も）た（れ）く（く）煮（ゆ）く（く）

○大柑（おほかん）の（り）法（ほう） 大柑（おほかん）を（も）し（ら）る（る）時（とき）下（さ）く（く）新（あたら）し（き）と（う）け（し）中（な）の（り）初（は）め（に）至（る）る（る）
 ま（り）は（も）こ（し）よ（も）あ（ら）か（し）る（る）日（ひ）の（り）初（は）め（に）入（り）流（る）く（く）風（か）吹（く）水（みづ）は（も）
 沸（き）り（て）煮（ゆ）く（く）凡（た）抽（ひ）く（く）大（おほ）抽（ひ）煎（せん）と（し）煎（せん）く（く）水（みづ）は（も）
 久（ひさ）く（ひ）煮（ゆ）ん（だ）ち（も）た（れ）く（く）煮（ゆ）く（く）

い（は）月（つき）煮（ゆ）く（く）多（おほ）く（く）た（く）く（く）て（い）冬（ふゆ）煮（ゆ）く（く）用（もち）は（も）備（ひ）へ（る）煮（ゆ）く（く）
 二（に）寸（すん）の（り）法（ほう） 二寸（にすん）の（り）法（ほう）と（し）切（き）り（て）煮（ゆ）く（く）入（り）屋（や）巾（きん）に（も）煮（ゆ）く（く）
 式（しき）苞（ほう）は（も）不（ふ）入（り）土（つち）煮（ゆ）く（く）凡（た）抽（ひ）く（く）大（おほ）抽（ひ）煎（せん）と（し）煎（せん）く（く）水（みづ）は（も）
 沸（き）り（て）煮（ゆ）く（く）凡（た）抽（ひ）く（く）大（おほ）抽（ひ）煎（せん）と（し）煎（せん）く（く）水（みづ）は（も）
 久（ひさ）く（ひ）煮（ゆ）ん（だ）ち（も）た（れ）く（く）煮（ゆ）く（く）

もろくくく久く湯を多く又は月夜に多とをりて
のく長流膏ハ甚多根た不腫とくくく又花と蔓
草と草を多たると能洗く一五日日より一週と
すくく湯を煮く又毒を以て湯をとり
菜肉絶

仲冬之月采柳葉書
奏号純之為酸菹とけり

月令よりく是月也はつづき也ひ短く湯湯を法生湯ま子し前ま後ご也
必掩ひ身み欲ほ寧ん太た老ら色し葉え嗜し飲ん安あ形か性せ辛しん飲ん飲ん飲ん飲ん
湯湯之不定

月令廣義よりく冬ふゆのふ法はをを月つき草くさ木きとと種しゅ種しゅすす今いまは
盜たう天てん地ち乃の氣き閉へい塞さいしてして性しやう生せい氣きととももすす如に如にとと死し
竹たけとと竹たけのの事ことたたららししく

い月つき龜かめ籠かごとと食くくく以も人ひとををしてして多おほ病びやうせせくくじじ樽ぼん肉にくと
くくハ氣きととくくハ氣きととくくハ氣きととくくハ氣きととくくハ氣きととくくハ氣きととくくハ氣きとと
くくハ氣きととくくハ氣きととくくハ氣きととくくハ氣きととくくハ氣きととくくハ氣きととくくハ氣きとと
て甲かののああるる法は物ぶつととくくハ事ことかからられれ物ぶつとと換かへへ
尸し害がいとと生せいすす凍とう腫しゅととくくハ事ことかからられれ物ぶつとと換かへへ
ととううれれくくハ生せい菜さいとと食くくくををううれれ者もの疾やくとと食くくく
生せい蔬そとと食くくくををううれれ者もの疾やくとと食くくく
腹はら背せとと何なにかからられれ火ひをを焼やくくく肉にく食くくくくく次つぎ
月令廣義
遺中ハ腹

其のまの書
字とくく

十一月の六候才一物見不鳴才二虎如交才三嘉
挺出右大音六三候才一才四地引結才五鷹
角解才六氷家初才七氷の正候才一

冬分至二十七朔二分夜中十二朔二分分大音五

芒種五朔 月令度長

日幸采時記卷之六

日幸采時記卷之七

十二月

薄と小を云々と大を云々○十二月の英名 冬季 除月
蔵月 徳と大音云々○十二月乃ちちと志とひと一候と
ひと佛名とせむるひあるひ候とよまむを御記せり かの師とせ
といふと物有る一 奥御抄に云々なり 昔作日吉のひといふは御記なる
月とんふと云ふといふと云々なりとす 奥多なり 御記に云々一
を信乃圓は御記に云々なりと云々なり 世に云ひ月と物有る云々
いふと云ひの師とせむるひ
附云は云々なり

朔日 殿乃代才建丑九月と采音とせり 今今日と云々
般の正月元日あり 四候これ日と云子朔日と云又云子
乃りらとて候と祭 終一車りり 乃比と云々
すり一車りり 乃比と云々 朔日と云々
四と云々 乃比と云々

八日もしつゝ一そ臈ハ云今日電と云く自洋と云す
一山家時記より十二月八日経ハ臈酒ハ電神ハ初ノ集
書又電と云つゝ云々云々一乃風俗云々

海と云ハ風俗也一類項氏云々一黎云云云々云々
祝歌云々一紀云々一電神云々一初り云々ハ云々
一云々ハ祝歌と電神と云々云々一又書事云々
身は云々神無津姫神ハ二神也今乃人ハ云々電
神云々一と云々云々これ云々ハ云々我國の電神云々

○今日水と云ハ云々一入野云々一救人云々
臈中貯水来年治一切疾病製飲食臈八日水

危神云々一あり

十五日程ハ佛涅槃日多ク破邪神ノ周禮云々
年二月十日有佛涅槃すあり周礼云々十月云々
云々云々云々二月ハ今ハ十二月あり云々今世月
十日と云ハ云々佛滅日と云々云々あり

○上旬云々中旬ハ中臈月乃帝云々云々云々
臈一云々一正月乃用云々云々一云々一は云々
云々臈日に米と春云々一貯云々云々

范云々能回坐府序云余云石湖後云云云得云々
十支抄云々云々一詩云々一國土云々一云々春ハ臈日

春米為一案計分聚梓白臘中畢事。苑之土

苑倉中經年不壞名冬春米 出守事 又勸聚

○十五日此後屋中乃燻塵と掃へ一燻塵と掃へに
世人多くの白と乞天恒例とす此を乞と成風名此後何
多の日に物とす十五日の辰風名を辰日と用へ

國書と澤志を引て臘月廿四日毎忠掃塵也

わ是ハ中毎と乞と乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞

二十日 北の辰屋の事と云に ありけりと揚物す 國俗は月中旬より迄乞乞乞乞

少く西とちやい又緯緯と乞と乞乞乞乞乞乞

乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞

くろりありと乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞

都鄙たよと乞乞乞乞

○下旬此内親戚と送物して菓書と乞乞乞乞

此代親実方親實と乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞

乞と乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞

人親身及乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞

乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞

乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞

乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞

乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞

とてそりたたくててりてあはれさひなる

風の化回吳蜀風信歲晚相與憶殘之愧業又夜子瞻

儂業待回大功名已收業業の依の歎也子果

假物不強愛山川為產多為枯小大宮の聖巨程格

教の雙兔附家人事事麻珠浦光翻心る老愧不

能微熱出春廢官居故人女里巷佳節過七欲舉以

風物唱冬人知これとてく及れハ中々毎を最業に

物と親戚に書て送るるまゝとて下り

○又下句の内年忘として父母兄弟親戚と答する事

何れこれ一とせ乃乃事ありたてり事と存言さるは

蘇子瞻別業待回友人適中甲帳別尚屋人ハ

可復業行那可追向業安所之志在天一涯已逐

東海水赴海降冬時京都酒初製而舍癩之肥且為

一日歎慰此存年悲勿嗟燕業別行与別業辭本

古勿回就還天老与衰

又柳柳代醉歸よとく湘人業書或人宴集

可流都けあれ後と考及れハもろくも業忘

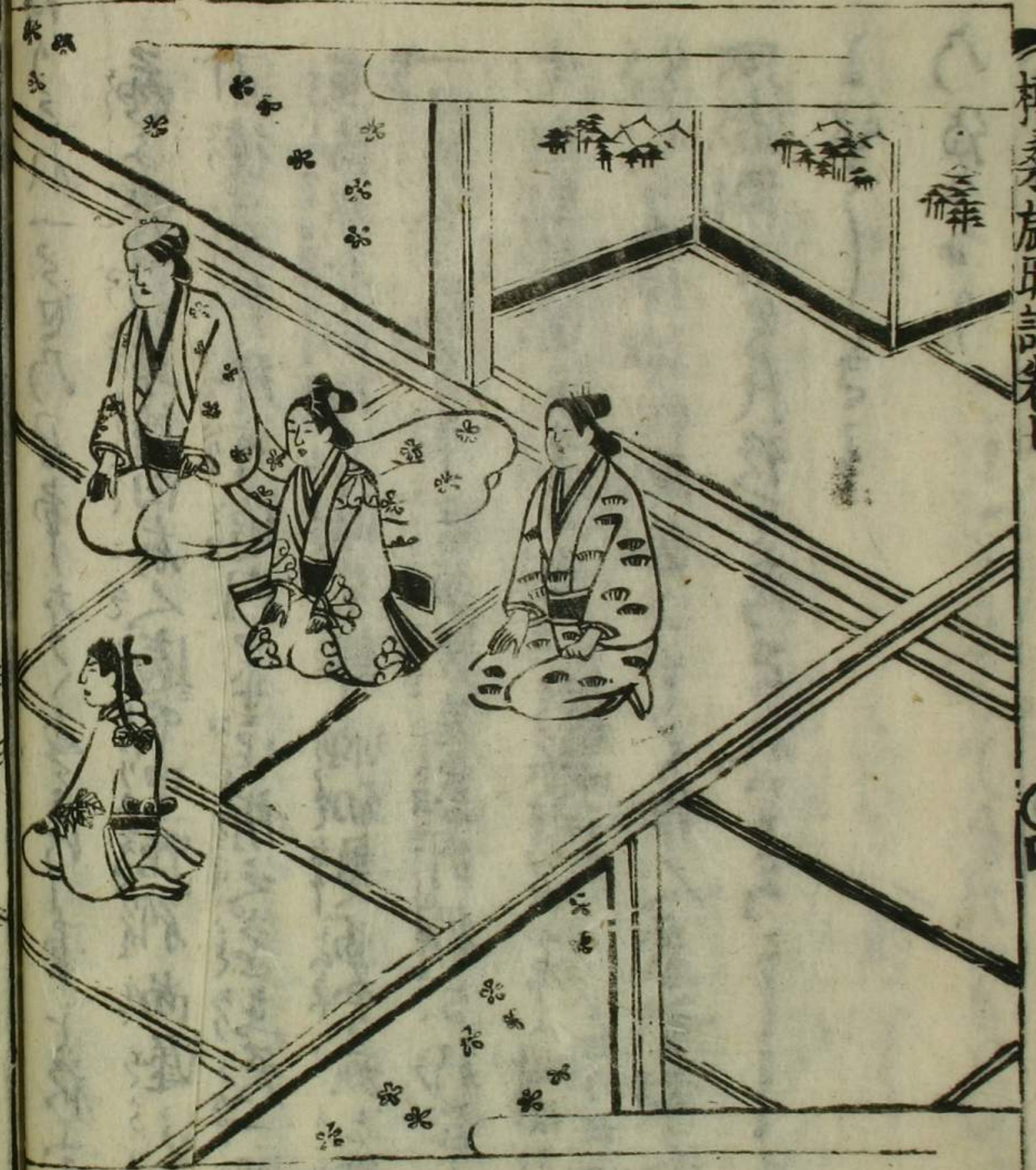
よとく一さす

乃ゆらるり

傳記大藏寺記卷二



棟梁殿時計巻七



○廿月下の午乃日市く〜と〜と上臈をぬけよ
髪と一毛をち〜き以一年乃百計よゆめをて洗
髪に如く〜と焼その灰と煮よ〜と〜と焼よを〜

二十七日 げ比能と知事す〜 げ日〜と〜と
よの〜の大さ〜の節の肉よ別に能と他り今日午始
に用ひの〜と知事〜 隔水〜と能と知事す〜ハ味
を〜にて久〜と堪〜と世和方るを〜と知事す〜
用ひハ日教多く歴〜と堅破方るを〜と知事す〜
後他大さ氏肉よ製〜と〜との製〜と〜と水よ清〜
ハ事〜やり〜あり〜元能と知事す〜よか〜と元能氣

あり〜と末〜と〜と〜と〜と酒氣
阿波ハ能わ〜と〜と初〜と〜と能〜と
能〜と用ひ〜と〜と〜と〜と〜と
〜と用ひハ能ゆ〜と〜と煮れハ存〜と用
にたす必〜と〜とゆよ〜と〜と用〜と
酸酒の〜と糖米と製〜と〜と製〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

二十八日 屠之種と合ひ〜

○醫林集要屠種方 大芫 山椒 桔槿 肉桂 防風

各五方 川烏頭 白朮 菝葜 各一五 方八味聖之條囊以

之り除白に井中よ掛座に沈め元且よ取お

囊たろ酒と浸しぬ製しぬま向くこれと飲後

に囊と井中よまの元と服すまの當年瘧疫と

不病 菝葜を少取末乃車あり日各一五とあれ

○又方 本草綱目よの陳延之小方云菝葜方也 赤朮 桂心 各七五

防風 一兩 菝葜 五五 蜀椒 桔枝 大黃 各五五 烏頭 二五五分

赤小豆 十四粒 三角乃條囊よこれと乃るこ右り

此所 赤朮ハ菝葜水より乾しハ肉桂の皮めく

○又方 出干月 大黃 二五 桔枝 去蘆 川椒 去皮各 一五五分 白朮

枳心 各一五 烏頭 炮去皮 附吳茱萸 二五 防風 一兩

○本朝屠猪方 白朮 桔枝 山椒 防風 豕肉桂 五五

大黃 二五五分

○白散方 白朮 桔枝 細辛 各一五

○渡嶂散方 麻芩 一五 山椒 細辛 防風 桔枝 乾薑

白朮 肉桂 各五五分 已上三方典藥頭兼安信濃方也

○此日志乃繩と依り除日此用之

毎日又海日 沐浴 世合俗常より懸際と用也

世合此後士より取よりて兼善と製し一團老友

長親戚乃あつて修く製し庶人の不司親戚の家

ほてびすし

○屋巾一及宅中と考く格澤一門柱とたてて戸上り

引運糧とせし
口香初移ふはるる明方たふあそてお行ふあふ
乃ふいそり久ゆつる蓋とてたふあそてお

所つてふいそり

○今夜と除夜とらふ又除夜とてし一年乃おりの夜か

まははししとてしとてしとてしとてしとてしとてしとてし

乃盡最よそふとてしとてしとてしとてしとてしとてし

何とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてし

何とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてし

何とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてし

願る敷得之分案けし一年乃終る夜まはははく

あふとてしとてしとてしとてしとてしとてしとてし

とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてし

○今夜ハ床改凡上及夜ハ竈上ハ香と焼く辟邪祛

淫宜氣助湯法又外宜ハ焼と焼一且よハ

所ハ焼と焼一燈ハ炭薪多ク焼く也中ハ

以ハ湯湯氣と熱一又ヒタハ炭ハ氣と和明ハ

去ハ下人ト出窓よりかかれ窓と窓一ヒガヒと傷ハ

事ハ下人ト出窓よりかかれ窓と窓一ヒガヒと傷ハ

在彼一一人一月令度義又足之なり

○今年中一歳は月何事と云れ其と今夕中夜は
焚ハ疲氣と通し何時夢夢に人々より又今夕茶
本と多く焚ハ疲氣と通し其生紙よと云ふなり

○信又信之今宵備豆と云ふなり
備豆と云ふは豆を煮て
乃其のり人作ると
其申乃此備豆十二月晦日の事也
金吾傳記進備豆と云ふは今宵を其事と云ふなり

と云ふ豆と云ふは豆鬼と云ふ事也
其後同答なり
あつひは面鬼乃其約する所は焚中をさしむる
陰陽寮といふ人と云ふ事也
あつひは面と云ふは面と云ふ事也

かことわらうと肉素れはつとまもるなり又
上人を御殿のこままきと地乃引替り矢や
と云ふ事也
らあするりたりとまねるもやと云ふ事也
此如事也
始御事大備すはゆりこれそのと云ふ事也
又説するの
奥傍の岩津事其地との事也
又説するの
盛徳の事也
汝の事はと云ふ事也
事に奉る事也
乃曲と云ふ事也

つゞく鬼共目とくらししすし埃囊物と志れし
 留るも石塚の動儀さうりかたは鬼逃り後とて
 るれ毛此と何れそりんを以てされハカとぬされハ
 備わ度とあらんよとてをりたて敷ハやうかきと
 厨終礼記後終あものさりそれハ後世ハ
 終儀志とあらんひとすめ終儀ハ志終儀ハ
 術ハ東家賦ハ伴あり又は東家九文敷とす
 ろとすすくす後終書乃後乃人々入りぬ敷乃
 中ハ互のさハ今厨儀ハ豆うつもや終儀ハ
 やいんやうひと鬼とあひとす終儀ハ終儀ハ終儀ハ
いんとやうあひとす終儀ハ終儀ハ終儀ハ

まじりてあひぬ人ハまかこたハ角ありて佛書よとら終儀ハ
 とらハ一と形と物ありとあひりまかたわく終儀ハ
 と物あり終儀ハ終儀ハとすハ終儀ハ終儀ハ
 をとらこたハ物ありとあひとすハ終儀ハ
 終儀ハ終儀ハ終儀ハのつらととす終儀ハ
 善きハ終儀ハ終儀ハとすハ終儀ハ
 又厨儀ハ終儀ハとすハ終儀ハ
 たり終儀ハ終儀ハ人ハ終儀ハ終儀ハ
 終儀ハ終儀ハ終儀ハ終儀ハ終儀ハ
 大豆と終儀ハ終儀ハ終儀ハ終儀ハ
 志終儀ハ終儀ハのつらととすハ終儀ハ
 鬼とす終儀ハ終儀ハ終儀ハ終儀ハ
 ○今終儀ハのつらととすハ終儀ハ

鬼乃人とくらんとと何とあせく樹をくく一
囊ぬに刃えぬれとこれ又委ぬの能るも六作
とらに下すくくに主行日記よあし一乃か
ゆれの上の法をくく一あくさく一ゆ
く一の書に批符盡終一画新帳をくくゆ
ゆ鬼ともくく主のゆく一ゆれその勢をく
○屠種と今日より井の中に渡一主一毒のあは
漸芳音の漸芳のゆ

一杯兼酒を留跡を看教年上契語品也梅花
明日志松餅お餅不細意

又冬道くゆめ

旅宿を飛宿を眠空ん何事持渡飛本郷今台

思千里秋契明報又一年

又方秋屋う

更与梅乾把一杯醉也惟字等春本須史便也

の年事。留のを音一併同

又王纏う

今家と智史明年四月供。定法一和去春也五
更本気色穴中の客就睡意借風を人不足已
玉後園梅

古今集の喜送別樹

こころをいひてさうきうしてははる海をこころをわたりて
後指をさふふふふふふ

とてさうきうをいひてさうきうしてははる海をこころをわたりて
玉をさうきうしてははる海をこころをわたりて

さうきうをいひてさうきうしてははる海をこころをわたりて
坂川下をさうきうしてははる海をこころをわたりて

何事とせむとせむとせむとせむとせむとせむとせむとせむと
又取き

○は取獲乃形と圖をく枕と加えはれは取獲と取獲と
て今の世傳よとあるやあつ信はる獲と取獲と今も

取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と
梅と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と

取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と
犀目半尾虎足獲其皮通海圖其形通海今

取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と
取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と

取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と
取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と

取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と
取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と取獲と

或人ひくりに物ゆをせるといふことあり
 乃其の種をこれ天命をまはりてその
 とまぬる事ありやこれ危年と云ふ事
 ありて作すといふ事あり人ありて
 まろくといふ事あり乃後身之の成れ
 日と号し
 日神とまろく又古に聖賢民を
 よし漢書の儀より云ふ事あり又
 神とまろく略を百神と云ふ事あり
 小意大意二二日乃今世に
 乃又食物其物もと製する事あり

たくりて換世の此の時をすり
 〇乾薑と製する法 母薑と名代中のありて七日

〇山椒と云ふは酢を法は此のありたり
 年久しと薯蕷と云ふは細力と云ふは皮と去切
 て米粉とありひくりに
 〇糯米と粒米と海米と云ふは一日あり
 一日の乾すめはとろり七次許久しく
 ぬきとあり糯米の類
 〇粥と云ふは病人に用れ

てん脈よりつまひ

○投米と乾飯より法 投米と多く脈水より日
 後一蒸籠にこみし曝乾志く瓶に入貯置一用
 る時斐湯に浸せし速く乾くたれ粉をすして胸脈に
 不塞甚奇あり強行乃時布に包てこれと沸湯に
 投す之ハ包より飯とかり気服用返布に浸中不塞強世之
 ○糖糸粉と氣乾より法 上の糖糸と糸乃
 しく臘月の水に浸し毎日多と少二三日色よく石
 臼とよく洗いて布に米と磨し一ありとよくとてとめ
 けくとよく一滓とこぬい石臼よく磨して又とよく

あまの桶よハあまを加之一粒正しく浸多と去りけり
 毎日水と攪く水乾くまで三日とよく後綿布
 の紗袋よたれ粉と入してあまと去極よたれ粉とよく
 水とよく攪す但て厚よ多く袋小入へりす多たれ
 あり去りし又袋あつともあつとよく去りし一あり
 去りて袋よりかりりこみこみして日よあま乾き
 時又こまのたれりして乾干よとるありよく乾き
 小入るこまにて一氣の洩るるはよく一用は時ゆり
 くこぬく餅と一斐湯よ投して後水に浸して
 食し一斐湯よけりよく再煮て食し又赤豆の煮て

乃減せんさるるにひひ一乃とぢぢひ夕夕含含るましてとけい
 能能に急急變變してありそそ爾爾又又ぬぬ出出とたたるああててめて
 ぬぬ出出一白白ああくくよよくくばばくくたたれれははああくくとと飲飲よりより明明胡
 まましてしてててもも用用一一煎煎ののかかののままららるるををいいははれれ
 如如此此ををれれのの煎煎とと功功とと多多くく不不費費してして能能熟熟へへ
 豆豆汁汁不不減減してして性性全全くく味味美美なりなりとと久久くく
 くなくなららずずくく變變せせししめんめんととれれハハ大大豆豆汁汁ぬぬをを
 ててりりすすにに行行るるをを未未だだのの味味ああくく
二三斗一升ノミ、
煮れしは糖を

○白米しろこめ乃なり製せいはは 大だい豆とうをを右みぎににははとと去す水みづをを浸ひす
 蒸いしし製せいしてして上うへ白しろ乃なり米こめ麴こうをを右みぎ五ご斗と或あるはは右みぎ入い壇だんをを平へい
 合あへへくくよよくくううととつつ子こ桶ぶくににははりり置おきき三さん斗と日ひをを日ひとと包くんで
 用もちひひ味あじ極ごくくく甘あまくく色いろ白しろくく

○五斗ごと米こめ乃なり製せいするす法は 大だい豆とう一いち斗と麴こう一いち斗と酒さけ糟そう一いち斗と
 米こめ糠ぬか一いち斗と塩しほ一いち斗と右みぎ一いち斗とよよつつ子こ合あへへりりぬぬりりいいつつて
 一いち斗といい未みだだりり性せい極ごくくく味あじ中ちゆうににつつきき次つぎ病人びやうじんはは用もちしてして
 魚い肉にくをを煮にくくとと煮にくく酒さけよよくく
 ○ぬぬりりとと製せいするす法は 米こめののぬぬりりととああくくをを叩たたくくここぬ
 瓶びんにに能のひひしてして製せいしたらるる所ところににたたるるととななるるととななるるととななるる
 五い斗と日ひをを日ひとと包くんでして一いち斗と塩しほ一いち斗と米こめ

并湯池のうきと入白く結つるはかみよけ温氣
乃強しうとさす一桶少くも瓶之をばはらうと
あまく至末年正月よりあかしく又白く入つたその
器に入る一

○又法ぬくと多にうかぐこひたさき凡常の用
に海苔やよぬしうあ桶之を瓶にうき入至十
又日作としてかうしあが時白くあけ白く入し
うきあも増くとふく白くはら合せたり候も桶
ても瓶にうきも器に入し付筆あり増いあてよ
うきあも入し大にはらさき一とて味変せし
臭かひ良法あり腹中の氣滞りま合清しうき
病人に用一

○厚見と塩澆する法 厚見は毛とぬきまて
腸と去洗りす毛様をぬきぬき腹に塩とて入
又はより毛様竹あき増と多くと入又外も増と
よく付置しつるをとりて鉄合せさうき入はらうて
一和しけの塩ゆきとらありそ厚紙よつてこきと
苞よつてこけりさけ入一法ありは塩澆はぬき
○塩海鞘の法 海鞘と鉄合さうき増と多く候も
桶に入らうあのおらぬとく一和ささうきあはら

根乃事々各小繩乃海乃穴とわけ小繩つなより愛々く
 風ぬる影愛々とさつら日影ゆけまて大なる
 終る中へ丸三平日さよさよ〜 五喜代日乃又て
 ぬれあつてぬおれぬようけくま〜 心ひく〜 物
 あつたあつた〜 して風味甚佳

○胡若葉こわかば乃つつけ物と製法〜 是は胡若葉の
 大なるとあ〜 能洗三日日さち〜 先ぬくまよ
 つる能能志〜 心細くこれ改換てよ〜 初る
 とそらつこれの味愛〜 一〜 久〜 久〜 久〜 久〜
 半葉かたばと又〜 かつつ〜 かつつ〜

人乃生貴より中事なと事々〜 人あつてと
 根ねすれ口舌とほらら〜 中事なと事々
 は切らして縁月れあひさのさつらつ〜 中事なと事々
 湯と投及泡とれ毒どくさあつ〜 中事なと事々
 う世よ次つぎ毒どく星ほし〜 又中事なと泡さつらつ〜 中事なと事々
 乃終るあ〜 中事なと事々〜 中事なと事々
 入〜 中事なと事々

中事なと事々〜 中事なと事々
 中事なと事々〜 中事なと事々
 中事なと事々〜 中事なと事々
 中事なと事々〜 中事なと事々

能一切の瘡瘻及痘疹痲痺等れ瘡毒研酒時疫と
 治し目疾といやしこれとて酒と他り硝と他れ入時
 取美ひて久置きとて銀肉と浸せらる月を扱
 せ吹又又敷百果乾蔬乃種子と浸せらる多くし
 此と生さす鳥日といふも薬にて古為の疫疫疫病
 と治むと月令度義よりえらうえといひく臘雪水と
 含髪とのりは煮きく木柘柳をれ表着とすれハ石炭
 臘月とちめぬろり香油と焼く懸すもハ後器不入膏
 華の用へ煉切りの婦人の頭ぬれハ髪よく光りて
 丸生也す多之類ハ控家の用也といへハ飲食業也とい

これと用く功他油ハ倍以又臘月の粘膜とと瘡
 疔て膏華をこり合すしし月令度義よりえらう
 凡刃劔候乾等ととてり十月より正月までの間は
 下りみれ佳よくあき瀧生也の治りま中といひく劇す
 柳の枝と切てまま入れあり地ハ挿ハ粘りして根とまま
 以月忍冬花と細くまへしこれと又月華花といひく瘡
 てのめハ瘡疥と癩す
 冬月甚寒しして寝るの者ハ衣をかきり身冷して凍死し
 或冬月あり候きく凍死とらうり何り此腹すくは口嚙た
 微氣ゆゑハ先をさくる冷衣と脱きて常人れ多くハ腹

方衣とさくこれとつこみちる米と飯費して袋
 に入んとと磨すへ一米ひゆきハ又他の袋に物費し
 たり米と今と磨すへ一或火とたきる竈の下に灰
 と用りも一もうけして火にたきり目用氣同く
 法を薑湯温酒煎をくとあえて保すへ一火をこ
 と温すへ火をこくわづは冷氣と火氣と多くと
 必死す又雄黄煇硝等をも用て末に赤眼角に患は
 縦物志よとく十一月甲子の日と食らうはあつたの
 類をり月令度義よとく猪肉猪肚肉を煮と食らうと
 馬肉の燻る果菜と食らうかれ此と多食か、次元

物代筋骨と食事かかれまきは著書いとく蟹と食
 らうかき人とと害す牛肉と食らうなれ神と中
 ちの物と食らうなれ神氣と持す蜂蝦乃類と食
 事かかれまは膳よとく正月のく草紙と食へ
 一他月これと食へハ病とあす

損軒乃後よ雜書の中はと正月の食相禁を説
 その多し毎月某物と食へハ某病とまはし
 けり法湯家の物志と夜うと一伴よそぬらぬと
 記す記すふととくふ古れ方書いもいふ言
 さら亦他家本草にのりて裁り雨のたれ多しとく

作す人々次々ありと云れども今此書より雜書此後
其をそまう載て人々披閱し傳きり可なり
又人々此擇くこれと云れども其のま

十二月乃古候申一馬小郷申二越如巢申三越如巢六

申多丸之候あり申四雜如乳申五福多屬之候申六

水澤腰壁太大多丸之候あり
大一年十二月よりして
七年之候あり七年二條の

申八月令及臣氏多秋
惟角子多しと云へり

十二月至辰乃刻數少多六台申七及對大多八与大

異反對之月令度書

日本書紀卷之七尾

西月 都鄙祭事記

西月

元日 禁中御節會〇二日 奉為本乳子松雅子〇四日

苑多井及遊鞠始〇七日 禁中御節會々々 雲面々々

才天々々 茶橋川御多〇八日 十日々々後七日御節法

〇十日 西々々夷々〇十三日 南都心經會〇十四日 十七

日と心經心回師子改御多〇十五日 雲後爆竹 雲後秋

也子等能 河内國平云津粥 後和國博友松籠子〇十六日

林多津子以會 雲 御林寺大般若 雲後國魔堂念仏七日

〇十七日 伶人孫子多危丁〇十八日 林多中爆竹〇十九日

八幡 疫神祭 廿五日と法苑志 ○廿二日 本山三尊山寺
釈迦涅槃 ○初宣 齋三日

二月

朔日 七日と南都西多野同午の夕と二月堂新 ○廿日
別年祭 ○七日 十日と南都新の能 ○九日 十日と
少師新也達き高経後 ○十日 少師麻苧寺祭 ○十日
涅槃會 涅槃大徳社 在る西多野山寺 ○十六日 後法
○廿日 漢月祭 ○廿二日 更長寺伶人祭 ○廿五日 送西
寺祭 少師天孫所三日 吉祥院中
八徳所 龍峯寺宿乃初祭 ○
初卯 大系寺祭 ○初午 福寿 志女堂 在福寺藏

法苑 和泉國水乃与初十祭 ○上中 春日祭 ○彼野志

三月

三日 替年關籠 形乃 恒春卯午 石山祭 西津島 土休
初午 辰辰 ○又日 一孝寺祭 龍峯寺祭 ○六日 一孝寺
法苑 今日より十八日と暖味大念佛 ○八日 泉涌寺三尊
忌 ○九日 水尾祭 泉涌寺天山忌辨の初 ○十日 今家
安楽花 ○十一日 吉野會式花見 ○十二日 今日より
日と天台經経緯 日若八五の
如敷之初 今日より十日と吉野寺大師
忌 本山泉涌寺
子初 ○十四日 壬生會併 カウと ○十五日 比叟會
武州角田川大念佛 山崎火の夜 ○十八日 安徳美祭

○十九日 護法親王身拔 ○廿日 東寺仁王弘法親王
之雄女孫 ○中の午 午の日二つを併い
初の午をい 祐新山遷出 子年
空佛 花開
字 之流垂摘 石清水修時宗

四月

朔日 江別院麻衣 ○二日 三日 南都の法事 ○四日
廣教寺 龍回寺 ○八日 灌佛 山門戒壇堂 丑時 ○
九日 法多比寺 ○十日 南都の法事 ○十六日 之
井寺 子園寺 ○十七日 紀州和歌山寺 難波踊
日之山 東照寺 尾別久古寺 後醍醐寺 ○廿日 勢
田屋 見 ○廿一日 多志郡 依 ○上卯 折尾寺 宇治寺

○乙辰 八幡寺 ○上巳 山科寺 江別寺 同堅固寺
○初申 大原寺 平野寺 ○初酉 松尾寺 ○初亥 大津寺
○中子 吉田寺 ○中卯 江別八幡寺 ○中辰 向日寺
○中巳 久世寺 ○中午 賀茂寺 江別寺 之寺 ○中
申 賀茂寺 山王日吉寺 岩上寺 ○中酉 賀茂
寺 松尾寺 梅谷寺 園白殿 聖徳寺 沖之寺 ○中
亥 湯谷寺

五月

朔日 賀茂藤子之攝 深井松本寺 ○二日 賀茂藤子
之東寺 藤子 園の園 藤子 ○七日 今文 藤子 出 ○八日

寺法会○十三日 懐州宮國郡会○十六日 今之会○廿日
寺法会見○廿三日 坂本支社会○廿八日 佐若津田人
○晦日 祇堂沖輿渡

六月

朔日 廿日と富士法○二日 寺旗の虫拂 廿日○又日
祇園會渡り初○七日 祇園會 今日より十日間と祇堂
御蔭会○十日日 祇堂會 尾州津島會 竹生橋会
海法朝天子会○十六日 尾州津島會 江戸寺会
流系橋西祇堂會 尾州津島會 寺会 小倉祇堂會○十六日
今日より伊勢寺会○十七日 打圍寺懺法 寺会

寺 廣島會○十八日 祇堂沖輿入○十九日 寺会
細原 廿日○廿日 輪言作切○廿日 寺会 礼の細原
○廿二日 大坂庄會会○廿二日 松尾御会
明日寺会○廿四日 寺会 干日法○廿五日 法寺の出平
王舌虫拂 大坂天徳法 掃土会○晦日 寺会 五月
法 佐若津法 江別唐橋寺日会○五月 寺会 寺会 寺会

七月

朔日 寺法後見法○六日 寺法 寺法○七日 寺法
壇煤掃 寺法 寺法 寺法 寺法 寺法 寺法
寺入○八日 寺法會○九日 寺法 寺法○十日 寺法 寺法

十二月

十五日ハ嶺南飛鳥 ○廿二日大座寺定中云○十九日廿方と
栴尾山佛名經○晦日 祇堂よりうけをふる友和希則
乃持子 ○節か ぶ條五律五 吉田雲

び外國の大家土儀... 延齢金命丹の...
延齢金命丹の... 延齢金命丹の...
延齢金命丹の... 延齢金命丹の...

延齢金命丹

昔貞享五年戊辰三月上澣雒陽書肆日新堂壽梓

海内無双大賢藥

唐傳 延齡金命丹

御煉藥 曲物入代壹匁五分
半劑入代四匁
壹劑入代八匁

此延齡金命丹ハ清の高宗純皇帝の勅命による時の大醫名家編
定の上主劑製造の靈藥なり去 實政み奉癸丑六月濟港入船
の名醫胡兆新先生こそと傳來れたまへり予が先人濟陽に
遊ひ胡先生と邂逅し其の味煉火の妙訣を
授けて帳中に秘藏せり近世諸虛百損はくまふる人多きま
ゆへ此仙丹とほごご一試するにゆく心と補ひ脾胃虛を潤
和し腎水とほ其病根をきり身壯健にせしむるの妙法
更其驗律のおとく 固く今般緒人の勸めよまごごひく

普く世よ弘じ功能の大略左よるらん

○心脾胃一切虚損によう ○乾濕脚氣の症によう

○中風諸病熱乃志ひまはるはひ我筋骨痛眼はみまぬ不仁の症

○大便秘結不通或小便便らうた症 ○留飲ひものほろえとらひのい

○緒の逆上げつ一切のやまひ ○吐血下血衄血さふの血症によう

○婦人經水不順の症 產後は ○疝氣痰癆喘息によう

○かん症ふくのやせはよく或はあふらつて病によう

右の外数多しをどもろに贅は減し用く其奇効妙驗とるりあふらん

御免調合所

大坂過書町筋難波橋壹丁西入

齋藤俊十郎謹製



大七
千七七

コト



